

報恩抄

御文①

御書新版……251ヶ5行目〜9行目
御書全集……321ヶ14行目〜18行目

このこと、日本国の中にただ日蓮一人ばかりしれり。いいだすならば、殷の紂王の比干が胸をさきしがごとく、夏の桀王の竜逢が頸を切りしがごとく、檀弥羅王の師子尊者が頸を刎ねしがごとく、竺の道生が流されしがごとく、法道三蔵のかなやきを焼かれしがごとくならんずらんとは、かねて知りしかども、法華経には「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」ととて、涅槃経には「むしろ身命を喪うとも教えを匿さざれ」といさめ給えり。

現代語訳①

このことは、日本国の中でただ私一人だけが知っている。このことを口にするなら、殷の紂王が比干の胸を割いたように、夏の桀王が関竜逢の首を切ったように、檀弥羅王が師子尊者の首を刎ねたように、竺道生が流刑に処されたように、法道三蔵が顔に焼き印を押されたようになるだろうということ、前から分かっていたが、法華経には「私は身も命も惜しまず、ただ無上道だけを惜しむ」（勸持品）と説かれ、涅槃経には「むしろ命も失っても、教えを隠してはならない」と諫められている。

御文②

御書新版……253頁 1行目〜5行目
御書全集……323頁 3行目〜6行目

同じき五月の十二日にかまくら鎌倉をいでて
この山に入れり。これはひとえに父母の
恩・師匠ししょうの恩・三宝さんぼうの恩・国の恩をほう報
ぜんがために身を破やぶり命をす捨つれども、
破れざれば、さてこそ候そうらえ。また賢人けんじんの
習い、「三度国くにをい諫さむるに、用いずば山
林にまじ交われ」ということは、定まれる
れ例いなり。
この功德くどくは、定めて上かみは三宝さんぼうより下しもは
梵天ぼんてん・帝釈たいしゃく・日月にちがつまでも知しろしめしぬらん。
父母も故道善房こどうぜんぼうの聖霊しょうりょうも扶たすかり給たまうらん。

現代語訳②

同年（文永十一年）五月十二日に
鎌倉を出て、この身延山に入った。
これはひたすら父母の恩、師匠の恩、
三宝の恩、国の恩に報いるためだけ
に体に傷を受け命を捨てたのである
が、身は滅びることなくこうして生
きているのである。また賢人の習わ
しとして、「三度、国を諫めて用いら
れなければ、人里離れた場所に隠栖
せよ」というのは、古今を通じて変
わらないことである。
この功德は、必ず三宝をはじめと
して、梵天・帝釈天・日天・月天に
至るまでもがご存じだろう。その功
徳によって、父母も故道善房の聖霊
も助かるだろう。